文化財通信くまもと

第６号
1993.3
熊本県教育委員会

池田・古園調査風景

はじめに

上の写真は、発掘調査の休憩時間の“一コマ”です。お茶を飲んでいる場所は、今回の調査によって見つかった弥生時代の住居跡です。おおよその構造が理解できるように、竹材などで簡単に復元してみました。こうして見ると、住居内では、想像以上のスペースがとれることがわかります。

第６号では、文化財調査第一係（農業基盤整備事業関連）が行なった調査のうち主要なものである、狩尾（かりお）・湯の口（ゆのくち）遺跡、狩尾（かりお）・方無田（かたむた）遺跡、狩尾（かりお）・前田（まえだ）遺跡、池田（いけだ）・古園（ふるぞの）遺跡（以上、阿蘇町）、ワクド石（いし）遺跡（大津町）、中尾（なかお）遺跡、別府（べっぷ）遺跡（以上、須恵村）、大原（おはる）・天子（てんし）遺跡（錦町）について、取り上げます。今回の調査でも、いろいろな成果が得られました。それでは、ご紹介しましょう。

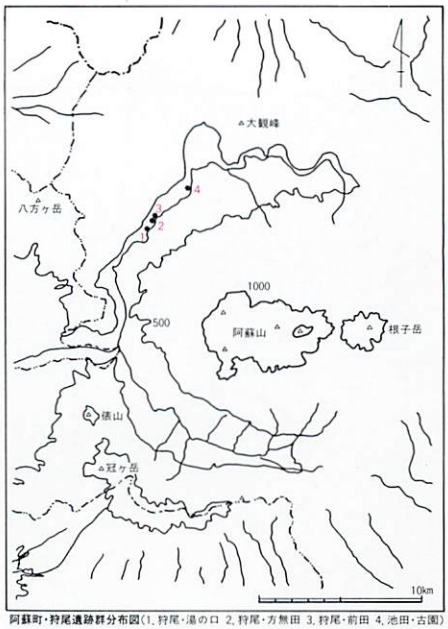
阿蘇町・狩尾遺跡群の調査と報告

これから紹介する４つの遺跡は、すべて阿蘇町にあり、その立地も阿蘇カルデラ内の南側に黒川を臨むやや高台（標高 約460ｍ）というほぼ同じような地形にあります。

調査は、主に水害による災害復旧工事に関連して、平成３年９月から平成４年７月までの約11ヵ月行いました。

その結果、縄文時代から歴史時代までのたくさんの遺構や遺物がでてきました。ただ、４つの遺跡とも弥生時代中期～後期（約2,100年～1,700年前）が主要な遺跡ですので、それぞれの遺跡で特に注目される事項について紹介したいと思います。

なお、現在詳しい内容がもりこまれた報告書を作成中です。



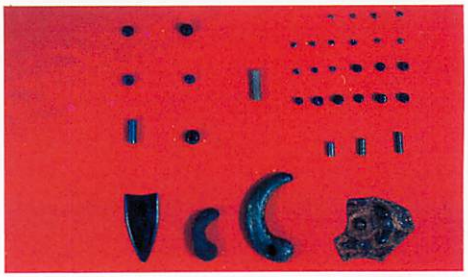
阿蘇町・狩尾遺跡群分布図（1. 狩尾・湯の口 2. 狩尾・方無田 3. 狩尾・前田 4. 池田・古園）

狩尾・湯の口遺跡	所 在 地	阿蘇郡阿蘇町大字狩尾湯の口
	調査面積	約5,600㎡
	調査期間	平成3年9月～平成4年5月

弥生時代の終わり頃から古墳時代の始めにかけて（約1,700年前）の竪穴住居跡（地面を掘り込んで作った家）が、50軒ほど発見されました。また、その頃そこに住んでいた人のなかでも、有力な人を葬ったと思われるお墓が、横に並んで３基発見されました。

●箱式石棺

薄い板石を長方形に組みあわせて作ったお墓を、こう呼びます。残念ながら、左右２つの石棺から、副葬品は何も見つかりませんでしたが、真ん中の石棺の蓋を開けると真っ赤な塗料（ベンガラ）が塗ってあり、ちょうど中ほどから鏡の破片が発見されました。よく見ると小さな穴が２つあいていました。おそらくこれは、ペンダントとして首からかけられたものでしょう。



狩尾（かりお）・方無田（かたむた）遺跡

所 在 地　阿蘇（あそ）郡阿蘇（あそ）町大字狩尾方無田
調査面積　約6,000㎡
調査期間　平成3年12月～平成4年6月

弥生時代中期の始め頃（約2,000年前）と弥生時代後期の終わり頃（約1,800年前）の竪穴住居跡や墓穴が多く見つかりました。
特に、弥生時代中期に作られた家の跡の発見は、とても注目されるものです。それは、阿蘇谷で見つかっている弥生時代の家の跡で一番古いものだったからです。

弥生時代は、米が作られ始めた時代です。北部九州に伝わった米作りが列島各地へ伝えられる、そんな時代なのです。おそらく、阿蘇谷でも弥生時代のいつ頃かに米作りが伝わったはずです。つまり、今回の発見は、阿蘇谷に米作りが伝わった時期を推定する手掛かりになるのです。

狩尾（かりお）・前田（まえだ）遺跡

所 在 地　阿蘇（あそ）郡阿蘇（あそ）町大字狩尾前田
調査面積　約1,700㎡
調査期間　平成4年5月～6月

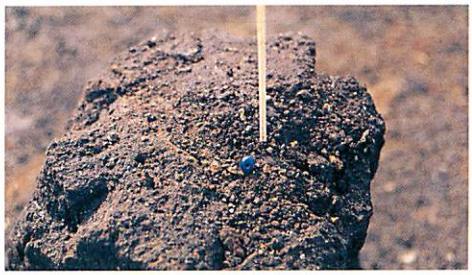
弥生時代終わり頃の竪穴住居跡13軒と、同時期とみられる掘立柱（ほったてばしら）建物（地面に直接柱を埋めて建てた家）が見つかりました。遺構の時期や広がりの様子からみて西隣りの方無田遺跡と同じ弥生のムラの一部と思われます。

玉（タマ）

３軒の住居跡から、直径約５ミリの濃青色のガラス玉が各一点ずつ、いずれも住居跡中央から出土しています。何らかのお祭りに使われた遺物かもしれません。

腐らなかった柱

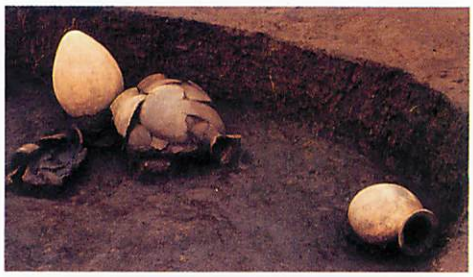
６号住居跡には、折れた柱が立った状態で出土しました。柱が焼け炭化したために残ったもので、当時の家屋構造を知る上で貴重なものです。



池田・古園遺跡

所 在 地　阿蘇郡阿蘇町大字狩尾池田・古園
調査面積　約4,200㎡
調査期間　平成3年12月～平成4年7月

弥生時代終わり頃の竪穴住居跡が43軒、見つかりました。また、土器、石器の他に多くの鉄製品も出土しました。



●三点セット

第６号住居跡からは、ほぼ完全な形をとどめたカメ・ツボ・ハチが、出土しました。それぞれ、煮炊きや貯蔵などに使い分けされたようです。

●ひる鎌

弥生時代になると、それまでの石包丁（稲穂を摘む道具）とともに鉄製品の鎌も使用されるようになっていきます。これによって、その作業能率もグンとアップしたことでしょう。

◆ 発掘トピックス ◆

銅鉾はっけん！

昨年行なわれた阿蘇町の池田・古園遺跡の発掘調査中のことです。「保管している遺物を鑑定してほしい」ということで、調査事務所に、ずっしりと重い金属製品が持ち込まれました。調査員が見てみると、一目でそれがあざやかな緑色をした弥生時代（今からおよそ2000年程前）の銅鉾の一部であることが、わかりました。

銅鉾を発見したのは、阿蘇郡阿蘇町狩尾にお住まいの石島政広さんで、約10年程前、たんぼでの作業中に偶然発見し、これまで大切に保管してこられたのだそうです。銅鉾というのは、青銅で作られた鉾のことで、中国大陸などでは武器として使用されていたものが、日本に伝えられたものです。ところが日本では、これが実用的な道具ではなく、儀式などに使われるいわば“飾り”として使用されたようです。

なおこの銅鉾は、熊本県ではまだ数例しか発見されていないとても珍しいものです。発見者の石島さんは、「そんなものとは知らなかった。県で保管して研究に役立てて欲しい。」として文化課への寄贈を申しでられました。このため文化課では、将来博物館での展示を含めて、大切に保存しようと計画しています。

銅鉾を持った古代人

ワクド石遺跡	所 在 地　菊池郡大津町大字杉水字小林 調査面積　約9,000㎡ 調査期間　平成3年7月～平成4年5月

ワクド石遺跡は、籾の痕がついた縄文土器が発見されたことで、全国的に有名になりました。その土器が作られたのは、縄文時代後期ですから、今から約4000年も前にさかのぼります。発見された頃はもとより、現在でも日本で最も古い時代の籾痕として、全国的に注目されています。

さて、このような重要な遺跡に調査のメスが入れられるきっかけになったのは、遺跡周辺で農業基盤整備事業の計画が持ち上がったからです。つまり、この開発で遺跡が壊されることになり、その事前調査が必要になったわけです。

〔縄文時代〕 当時の家の跡や墓などが見つかり、またおびただしい量の土器や石器も見つかりました。特に、阿蘇の黒岩と呼ばれる凝灰岩で作られた十字形の石製品やヒスイ製の管玉（孔に紐を通してネックレスにする装飾品）などは珍しい品物でした。

残念ながら、今回の調査では、籾痕土器は発見されませんでした。しかし、縄文時代の米作りを知る手がかりにと、土器の中に入り込んだプラントオパール（コメ科の植物に入っているガラス成分で、種類ごとにその形が違っているそうです）を探そうという試みも現在おこなっているところです。近い将来、縄文時代後期に米作りが行なわれていたことが科学的に証明されるかもしれません。

〔古墳時代と平安時代〕 古墳時代のムラの跡も発見されました。15軒の家の跡がそれですから、当時としてはあまり大きくないムラのようです。掘り出された土器を見ますと、今から約1600年ほど前のものでした。

平安時代では、竈（かまど、くど）がついた家の跡が8軒見つかりました。また、この家を囲むようにして掘られた溝も見つかりました。当時のムラの広さを知る手がかりになりそうです。

中尾遺跡、別府遺跡	所在地　球磨郡須恵村中尾・別府 調査面積　約8,000㎡ 調査期間　平成3年7月～平成4年3月

人吉市街から球磨川沿いにさかのぼること、車で30分。上流に向って左側にある丘陵地のうち２箇所を調査しました。谷をはさんで約100ｍ離れた両遺跡からは、先土器(旧石器)時代から近世までの土器や石器、そして人々の掘った穴などが発見されました。特に中尾遺跡では縄文時代、そして別府遺跡からは平安時代の遺物が数多く見つかっています。

中尾遺跡

石で作られた約２万年前のやりの先が、10点余り出ています。これらの石器を作るときにできる剥片と呼ばれるかけらは見つかっていませんので、ここに動物を追ってきただけなのかもしれません。縄文時代では、早期(約8000年前)の土器、石器が多く作られ、残されています。球磨川の河原から拾ってきたと考えられる、さまざまな石を用いた多くのやじりや剥片が見つかりました。この時代になるとある程度の長い期間この地で生活していたと考えられます。それは、たくさんの丸い石を集めて作った炉の跡が見つかったことからも知ることができます。

別府遺跡

たいへんな作業ですが、遺跡の真ん中を３ｍばかり人力で掘ってみました。黒い土、黄色い土、粘土などが重なりあって出てきます。ふたつの黄色の層は火山灰で、いつ頃降り積もったものかがわかっています。遠く離れた遺跡でもこの火山灰が見つかればそれを手がかりに直接比較できるため、貴重な土層の発見でした。さて人々が残したものには、家の跡・溝・土器捨て場があります。平安時代の土器捨て場には、おびただしい数の茶わんや甕形土器にまじってかまどが発見されました。これは県内でも２～３例目の珍しいもので、昔の人々の生活を実感できる資料です。ほかに、石で作った鍋・文字のある土器(墨書土器)・貨幣・鉄製品など様々なものが出土しました。また、江戸時代以降のものと考えられますが、しっくい(土と石灰を混ぜて作ったセメントの様なもの)で作られた四角い穴からは、犬の骨も見つかりました。

大原・天子遺跡	所 在 地　球磨郡錦町大字木上字大原 調査面積　約2,500㎡ 調査期間　平成3年6月～12月

大原天子遺跡は球磨川上流に向って左側の標高約177ｍの台地上にあります。国営川辺川農業水利事業にともなう発掘調査を行った結果、縄文時代晩期(約2,400年前)を中心とする遺物、遺構が発見されました。

主な遺物・遺構

土器、打製石斧、すり石、たたき石、黒曜石の石器や剥片などが見つかりました。土器は縄文晩期の後半にあたる黒川～山の寺式にあたるものが中心で、弥生時代のものも数点出土しています。打製石斧は土掘り具で、すり石、たたき石はものをこすったり、たたいたりするのに使われたと考えられるものです。これらの遺物もその特徴などから土器と同じ縄文晩期にあたるものと思われます。

遺構としては、一辺２～３ｍ、深さ15～20㎝の四角形の穴が２ヵ所見つかりました。その形から住居の跡ではないかと思われます。また直径１ｍ、深さ80～100㎝の袋のように中のふくらむ穴が４ヵ所見つかりました。これはどんぐりなどの食料を貯蔵するための穴と考えられます。そのほか食物を調理した炉の跡と思われる石のかたまり（集石)が１基見つかっています。

遺跡の特徴

この遺跡の特徴としては、まず遺物の時期がほぼ一時期に集中すること、生活に使われる道具があまりないこと、遺跡の規模が小さく、遺構の数が少ないことなどがあげられます。このことから、この遺跡は生活の中心となるものではなく、むしろその周辺に短かい期間営まれたものであると思われます。また遺跡からは石器の材料になるような石のかけらが多く見つかっています。
このことからこの遺跡は打製石斧などを作る場であった可能性もあると思われます。

平成４年度 国・県の指定文化財情報

今年度、国指定（１件）・県指定（４件）が新たに重要文化財に指定されました。わたしたちの文化財を理解し、大切に守りましょう。

【国指定】

種類及び名称　国指定史跡
「永安寺東古墳・永安寺西古墳」（えいあんじひがし）
指定年月日　平成4年12月15日
所在の場所　玉名市玉名字永安寺3235の2 他10筆
概　　要　菊池川右岸の丘陵裾部にある装飾古墳。東西に約40メートル離れて並列する。装飾古墳のなかでも優れたものである。

種類及び名称　県指定史跡
「柏木谷遺跡」（かやのきだに）
指定年月日　平成5年3月17日
所在の場所　阿蘇郡久木野村久石字柏木谷2826　他12筆
概　　要　遺跡の空白地帯とされていた阿蘇南郷谷で発見された、縄文、弥生、古墳及び中世の遺構群。優れた原始文化が栄えたことが確認された。

【県指定】

種類及び名称　県指定史跡
「つつじケ丘横穴群」
指定年月日　平成4年5月20日
所　在　地　熊本市黒髪7丁目577-1 他3筆
概　　要　土器の配置など埋葬直後の祭の跡をそのままにとどめた全国的にも珍しい古墳時代後期の横穴群である。

種類及び名称　県指定重要文化財
「大信寺地蔵堂」（だいしんじ）
指定年月日　平成4年8月12日
所　在　地　人吉市南泉田町152大信寺境内
概　　要　江戸前期と見られる建造物で、人吉・球磨地方の禅宗様の変遷を知るうえで学術的にも貴重な建造物である。

種類及び名称　県指定重要文化財
「古事記伝」写本
員　　数　全44巻
指定年月日　平成5年3月17日
所在の場所　山鹿市大字鍋田2085
山鹿市立博物館
所　有　者　熊本市花園7丁目14-12
及び住所　淵上健次郎
概　　要　肥後の国学者帆足長秋とその娘京(みさと)が伊勢松坂の本居宣長を訪ね、飜刻本（ほんこくぼん・木版で印刷した本）完結以前に書写したもの。学術的にも貴重なものである。

〈編集後記〉

今回は、調査第１係での調査成果をお知らせしました。これからも、より身近な文化財を目指して発行を重ねたいと思います。みなさんからの御意見・御感想をお待ちしています。

第　６　号
平成５年３月31日発行
発行　熊本県教育庁文化課
熊本市水前寺６丁目18－１
電話096－383－1111番(内6715・6716)
印刷　㈱　敷　島　印　刷

04	教委	教文
③	００３	